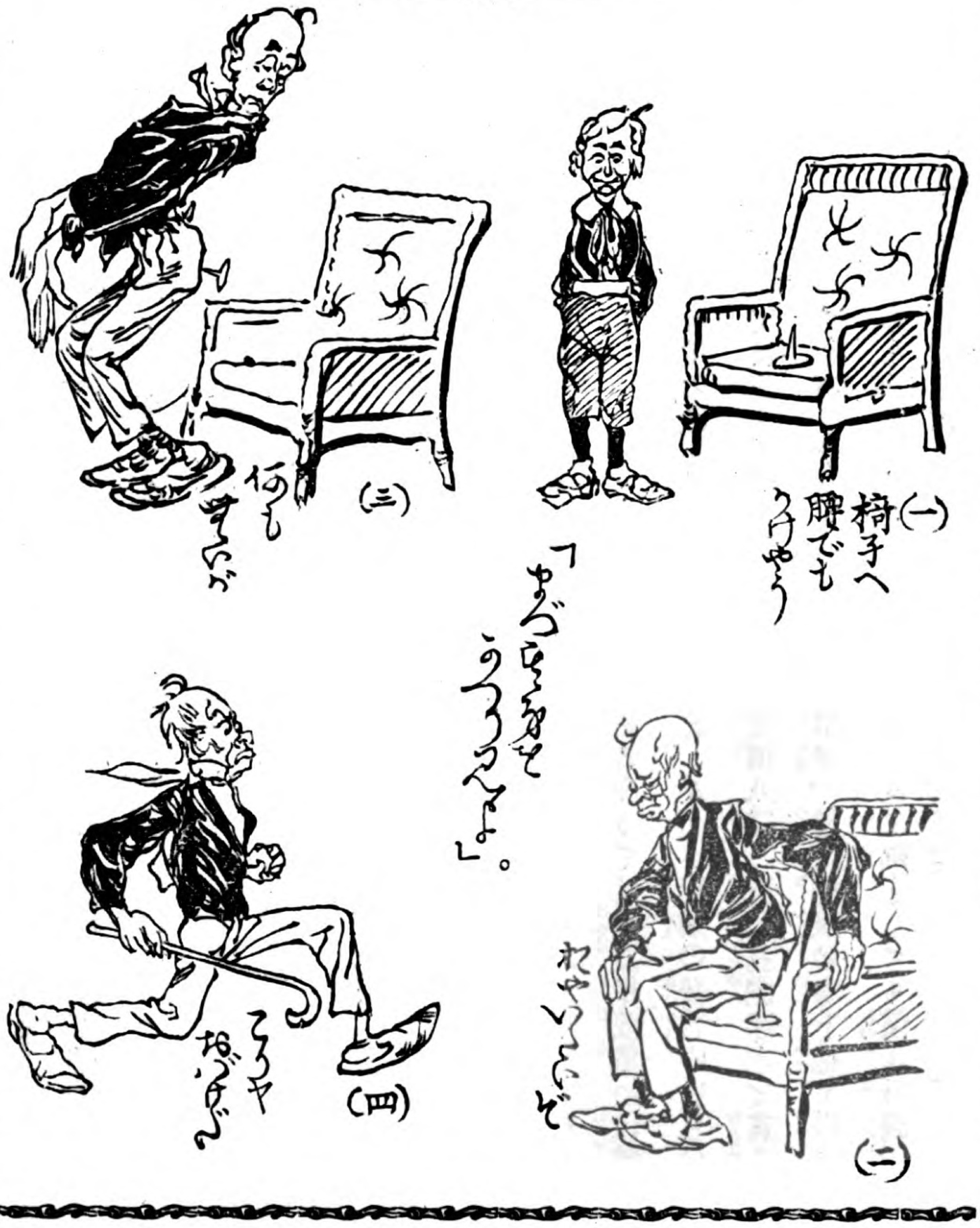
いらつめ第廿八號目次

●挿畫……嬌面を分つ
●社告……體裁改正の趣意
●小說……心づくし第一回上（毛布野女史）
●家政……閨の心得
裁縫獨學び初等＝總論＝單襦袢縫ひ方（木下貞子）
裁縫獨學び高等＝足袋縫ひ方（木下貞子）
食麵包製法
●文藝美術……唱歌作り方初學（承前）
懸賞文藝移り香（俳句和歌唱歌總十九篇）
●答書……（イ）煙管をキセルと言ふ意味＝（ロ）龜井戸流葛餅製法＝（ハ）蒸羊羹製法＝（ニ）油虫を除く法＝望江南培養法
●雜纂……佛國新流行化粧藥ポマドンヌール製法三種
めきしこ國の奇風
諸物數へ方
故事の有る國語づくし（其二）岩戸柏、岩代の結び松、古の野中の淸水、いそひ杉、五の障、五の色の浪、井出の下紐、井出の山吹
扇の肝要の起原
マミムメモの字義
日本最上小說十種
成立學舍女子部
本多せん子
●小說……松の下露（美妙齋主人）第一滴上
外に通信問答及び餘興



いらつめ第二十八號
發行度數增加及び体裁改正の趣意

いらつめは明治二十二年十月廿二日發兌の第二十八號からして、やうやく年來の宿志を滿足し、左の件件の改正を行ふ榮譽を荷ふ氣運に至る事を得ました。

第一　明治二十二年十月廿二日發兌の第二十八號から毎月四回（八日、十五日、二十二日、及び三十日 閏月は廿八日）發兌する事。

第二　紙幅は從前の通り、但し丁數は毎號二十ページ乃至二十二ページとする事。

第三　定價は毎號一部金二錢五厘とする事。

第四　雜誌の記事は益從前の規模を廣め、毎月二回即ち隔號には優美な人物、花鳥、景色などの銅石版大畫を挿み、其餘洋琴などの樂器に用ゐられる新曲の譜表を掲ぐる事。　すべて讀者をして快樂と利益とを得せしむる事を務むる事。

以上が改正の大要です。　改正の突然なのは定めて愛讀諸孃も駭かれた事でしやう。　しかし、それは社會に發表したのが突然と言ふだけ、實に是等改正を實行したいとの望は吾吾が一昨明治二十年七月始めていらつめ初號を發刊した時から抱いて居ました。　其以來發行度數を增す事に就ての大方の督促は跡を絕たず其御厚意を報ふる氣運の熟したものか、今法律第二十一號を以て郵便稅改正の便さへ有ッた、すなはち之を便として終に斷然改正に着手したのです。　通信問答の如き、至急を要する事も無くは無い、それで一ヶ月後れて一事に因れば二ヶ月一答を見るやうでは甚だ甲斐無い仕儀、今度の改正ではそれも救へました。　從前の發行のいらつめでは三十六頁乃至四十頁で定價八錢。　敢て利潤などと貪る譯でも有りませんが、彼是の事情、常に御氣の毒を抱くのみでした。　が、今度からの定價では二部としても僅に五錢、そして紙數は從來の四十ページより稍多いこと。　その他、一ヶ月として數へれば在來は八錢で買ひ得たのが僅に四十頁、今十錢未滿で買ひ得るのは八十頁以上、損益は言はずとも明白の事、此點に於ては吾々もいさゝか愛顧諸孃の御厚意に報ひ得たと信じます。　是が今度改正の利益の其一です。　記事に於ては爰に喋々するのも既に大方諸孃の御目の有る事ゆゑ

申しますまい。　只吾々が諸孃諸君の御伴侶となり、また助言者となる事の實をとして、この第二十八號からは然るべき學校で修業され、又は世故に熟練された、令名の有る貴婦人淑女を撰んで編輯の一部の擔當を請ひ、男子の心附かぬ處は其向からの注意を求め、彼是相整へて行く事に決めました。

其他此度の改正に就ての利益は言ひつくせませんが、爰では改正の御披露だけに筆を止め、その餘は愛讀諸孃の公平な御批評に任せます。　猶御忠告の有る處は從前のとほり充分に御開申を願ひます。　敬具。

いらつめ記者

附けて改正の定價は廣告欄内にありますから就て御覽を願ひますが、從前からの豫約の方々です、これらの方へは號で定めず、其從前からの豫約期限の盡きる迄は改正以後のいらつめ三部を從前の一部と看做して差あげる事に定めました。

また懸賞文藝で應募得點なさッた向へも前同樣、號數では定めず、期限で定めて差しあげる心得です。

小説

第一回上

毛布野女史

世が世なりせばとの繰り言も近頃口には出さずなりて、昔は蛆虫と見做せしものも、今は一重の壁隣り。　立つる煙りは細けれども士族の二字を門札に最と筆太に記したるは猶は古を忍ぶの餘意か。

主人と見ゆるは年の頃五十四五にもなりぬべし。　頭髮に霜を戴きて、目には霞を籠めたる樣子。　其身に纏ひし葛布は先祖傳來の品にもあるか、色は變りて見ゆれども、宅間の家の定紋は猶ほ明らかに見るを得べし。　時候は炎暑の最中にして鼎の底にも均しき住居、煎りつけらるゝ堪へがたさをも厭ふ色なく内職の楊枝を削る傍らには十六七とも見ゆる處女が側目も觸らず毛糸の編物。　垢に染みたる單衣を着たる形容は甚く窶れたれども、何處やら品位備はりて、賤しげならざるのみならず、鬢よりさがる後れ髮を透して見ゆる雪の膚、憐れ頭を廻らさば、此のむさくるしき陋屋も忽ち光輝を發すべきをと抓癢く思ふもあるなるべし。

折しも轟然耳を貫く午砲の響きに娘は編物を下に置き、

「もう午砲が鳴ッた。お晝飯に爲やうか。」と獨り喞ちつゝ起んとせしが、何やら急に思ひ出したといふ體にて

「あのゥお茶は何にか買りましやう。御好きなものをさう仰しやッて。」

「いや菜なんぞは何んでも苦しうない。武士たるものが戰場に向ッては梅干一顆で喰べるのが常の嗜ぢや。己れなれば何にもいらんが併し汝が喰べるなら買るがよい。」

「でも妾が折角買ッて上ましやうと思ひますから何卒さう仰しやッて。」

「そりやア辱じけないが、いらないよ。一體己れは、な、年端も往かない汝が此の熱いのに汗を流して取ッた丁目で買ふたものが何う甘ッては喰られやうか。不甲斐ない父とも思はぬ孝行をして與れるので斯うして生きて居られるのが心外ぢや。それに余所の娘なら届かぬまでも頭のものから着るものを强情るでもあらうに、薫ぶり腐た形をして何んとも言はずに居るを見て己れやもう面目なく、あゝ世が世であッたならば綺羅を飾らせ人に見せて羨ませも爲やうものにと殘念で堪らない。それに何んぞや菜なんぞの撰り好み勿體ない罰が當るわ。」

「あゝらまア慈父さんと云ッたら否で御坐います。何時でも右様ことを仰しやッて。」

いふも少しくうるみ聲。早くも堰きくる涙をばじつと堪へて俄かにつくる笑顏。

「それでも御金がありますから妾は左様云たんですものを。」

「はゝ串戲いふな。此の米の高いので日々の活計さへやう〱だのが何んで餘計な金があるものか。」

「だッて妾は持ッて居ますよ。」夫れに今田屋さんでは妾のをば余所のより高く取ッて下さいますし其外にも。」

と云ひしが後は口籠る樣子の怪しく見えければ、父は不審の思ひをなし、

「どうして汝が其金を持ッて居るのか。」

問詰たれども答へはなくして俄に面色變りしは彌以て合點往かずと

「琴や、汝の形容はどうも變だな。若し人の物でも盜みは爲ないか。」

「いゝえ。」

「そんなら何うして其金を持ッて居る。さア明白に言へ。」

斯ぅ貧乏はして居るが宅間信種だ。次第によつては先祖への手前、其儘には捨置んぞ。」

と以ての外の怒りなればお琴も今は包むに由なく、説き出したる事の顛末、其大略は左の如し。

一週前の夜のことなりし、父信種が眠りに就きし後にてお琴は行水を濟まし、同じく床に入らんとせしが、猶は蒸し熱さの堪へがたければ、雨戸を開らきて只一人折々吹き來る夜嵐を肌に受けつゝ快よく我と忘れて納涼居たるに、何時しか種々の妄想が蝟の毛の如く襲ひ來て、甚く精神を掻き紊せしゆゑ更に眠氣を催さず。夜の更るをも知らでありしが、果しなければ思案を定め、いざ眠らんと獨語ながら、戸締をする其處へ誰れとは知らず門口にて宅間樣とは此方にやと訪ふ聲に何心なく應と答へて立出れば、見慣れぬ男は立ちながら會釋をして懷中より包を出して御届ものと渡すを手に取り、表書を見れば確かに妾の名宛。心に不審と思ひしかども、兎に角中を改めなば、委細のことは知るべけれと、封押し切れば個は抑も如何に、無名氏よりと記せしのみにて、紙幣百圓封入したり。

家政

閨の心得

桐の葉も落ち、蟋蟀も露にふるへる時節と爲ッては早冬となるに間も無い事、一雨が一雨と寒さを呼んで閨の趣も亦夏とは全く變はる事でしせう。是かられ燈火親しむべしと云ふ時節、就て夜の長さ、また寒さ、今すなはち閨の心得を云ふのも無駄では有りますまい。

是から益々寒くなるに從ひ、淑女方も厚い夜具を被けたり、綿の多い蒲團を用ゐたりとて其寒さを凌がれる事でしやう。が、此厚い夜具、是が最も注意すべき物です。如何にも薄着で夜をば透せません。しかし厚いのが必ず暖い物では有りません。云ふまでも無く、木棉などは温度に於て毛織より劣ッて居る物（絹等は猶）で、そして毛織同樣の温度を保つだけの木棉に量にして毛織より多く爲なければ爲らず、それこれ何うしても木棉類の夜具は多く、重くなるまで掛ける樣に爲ります。すると、重い夜具は胃のためにも大毒で、大に食物の消化をも妨げる物、それに伴ッて是がため怖い夢を見る杯の事が起ッて直接又間接に身躰を疲勞させる種に爲ります。ならば何を被けたが宜からうかと云ふに、外でも無

く、毛織物に限ります。　勿論日本では毛織物と夜被ける習慣が無かッたため、今假に從來の夜具を悉く毛織にのみ代へやうと云ふのも一寸難い話しから、今の處では、胡衣とか、掻巻の類に添へて毛氈などを用ゐればそれで先充分と言へます。　胡衣や掻巻は元々輕い物、それに輕い毛氈を一二枚被ければ實に快く、あたゝかく夜をば過ぐせる物です。

毛氈には毛の柔いのも有り、又剛いのも有りますが、一般に人（殊に女性は）その毛がちく／＼するのを嫌ひます。で、毛氈を被けるのを全く嫌ふ人も有りますが、是は直に肌に接するやうな處へ被けるから惡いので、直に肌へ接する處へは木綿物を用ゐ、扨其上に毛織を被ければ何の事も無譯です。そして又直接に肌に觸れるには毛氈よりも仕立てゝある胡衣か掻巻の方が寐亂れても側へ落ちて仕舞ふなどの事が有りませんから宜しいです。　又地方に因つては夜寐衣を用ゐぬ處が有ますが、是は衛生上、又品行上必ず用ゐるべき物です。

毛氈の掛方に於ては一寸氣と注けて宜い事が有ります。即ち毛氈は大抵二つ折にして被ける物、それで其折目の方を頭へ寄せ、反對の方を足へ寄せて被けるのが一般の常で、西洋人さへ此樣にして居ます。　が、是は下手なのです。　眞に上手に被けるには折目を裾の方へやるのです。　夜、蒸しあつくなる事も有る、其時一枚ぐらゐ着物を剝ぐのにこの第二の法で被けてあきば一寸すこし捲くれば些し剝いたので澄みます。　さも無いと起きて掛直すのが面倒とて寐惚眼で宜い加減に手當り次第剝いて仕舞ッて終に其忽ち眠ッた間、風邪などに魅込まれます。　又毛氈により、折目を右か左へよせていゝのも有りますが、此時には何うでも爲ります。ろして又被けた物を剝ぐ時、この時よは勢に任せてよく一度よ澤山剝ぐ物です。　さうすると、今まで熱して居た身体が急に冷氣に遇ひ、忽ち風邪を引くやうに爲ります。　から剝ぐ時には成るべく些しづゝ剝ぐのが宜しいのです。

枕元には成るべく灰吹、含嗽水などを備へて置きたい物です。　是をば驕の沙汰と言ふ人も有りますが、決して驕では無く、全く身体のためです。　若い人は左樣でも有りませんが、老年の人は夜よく目を覺すもの、其時口に溜ッて居る、腐ッた唾液を嚥みこんだらそれこそ毒な事です。　此時水で口を漱ぐ其心地宜さは中々言ひ盡くされぬ程の物です。　枕元の灰吹や含嗽水は成るべく顚れやすくない器に入れて置くことです。　得て時にれ我知らず手なゝ延ばして其器を顚す

事が有る物です。　含漱水は只の清水でも、微温湯でも宜しいです。が、まづ臥床に入る前用意して其中に肉桂か薄荷を一二滴たらした物でも宜しいです。是は口中を爽にするためです。

閨に燈火を置くが宜いと言ふ人も有り、又置かぬ方が宜いと言ふ人も有りますが、何方かと言ふと閨には燈火を備へて徹夜の有明でも置くのが宜しいです。　成程洋燈などを點けて置くのは些し危險な患も有りますが、試に地震とか火事とか、俄に非常が起ッたと考へて御覽なさい、其時部屋が眞の闇で有ッた時には突然飛び起きても更に方角も（我家でも）知れず、壁や襖に突きあたる事が度々有ります。　ならば燈火を置くとして、其燈火には何がいゝかと言ふに、一寸是は考を要すべき事です。　まづ種油を用ゐる燈火ならば更に危險は有りませんが、洋燈に至ッては誰も知るとほり迚も心を許せません。　しかし、是にも救ふ法は有ります。　その法とは先よく油氣の脱けた石炭油の壺（ブリキ製の形四角な遊）に壺全體の半分ほど灰を入れ、其灰をよく平均し、其上に小さなブリキ板を置き、扨其ブリキ板の上に洋燈と置くのですが、洋燈は腰高で無い方が望ましいです。　さうすると仮令地震か何かで非常な激動が來ても洋燈は決して顚れません。萬が一顚れたにしろ、洋燈が顚れゝば石油壺もたふれる事ですから、中の灰も溢れて直さま火を消して仕舞ひます。　また洋燈の取扱方です、夜明に點ける時にはよく大抵の人は心を細くしますが、是で油の減が少いと思ふのは大なる誤で、明るくして置くのと油の減は更にかはらぬ物です。　種油を用ゐる燈火に於ても又同様です、油を些し注いて置くのは却ッて損ですから、是は充分に注いて置くのに限ります。

（未完）

裁縫獨學び（初等の部）

木下貞子

裁縫が殊に婦人に入用とは今更言ふ迄も無い事で、今まで此雜誌には塲合が無くて裁縫の事をば載せませんでしたが、讀者の中には初學の方もあり、又稍熟した方もある事、それ故双方を取ッて初學に向くのと稍熟した方に向くのと二種類を擧げました。

まづ着物の種類から言ひましやう。　老若男女により色々

違ひますが、今概して言へば、小袖、羽織、半纏、胴着、單衣、帷子、襦袢、袖無、脚半、股引、振袖、袴、被布、合羽、蒲團、坐蒲團、夜具、胡衣などで、また其外にも色々有ります。　更に仕立方に就て言へば、一身、二身、三身、四身、中裁、本裁、小幅、大幅など又色々有ります。　右の中、一身とは當歳から二三歳までの者の仕立方、二身とは三四歳から六七歳までの者の、三身とは七八歳から十四五歳までの者ので、中裁以上本裁に至ると大人の着用と決めてあるのです。

着物の裁方の順序は文で言はずとも圖で直に分かります。縫方の順序に至ッては勝手には出來ません。　即ち先第一に袖を縫ひ、第二に背を縫ひ、第三に脇を縫ひ、第四に衽を付け、第五に衿を付けるのです。　但し單衣なれば第六に衿下及び褄を絎るのです。　尤も男の服なれば直に袖を付け、女の服なれば衿を附けてから袖を付けるのです。　唯袷なれば男女とも此限りでは有りません。　袖の縫目は袖附を右にし左の袖は自分の對面へ返し、右の袖は自分の方へ向けかへすのです。　背縫は衿肩を右に持ち、自分の方へ返すのです。但し裏は自分の對面へ返すのです。　脇縫は前身頃の方へ返すのです。　衽の縫目は衽の方へ返し、衿も又衿の方へ返すのです。

袖附の縫目は袖の方へ返し、裏は身頃の方へ返すのです。

單襦袢縫方　第一袖を袋縫ひにして之を引き返し、下に置き、正しくし、袖幅を度り、折目を付け、第二に背を縫、下に置き、後巾を度り、また肩幅を度り、折目を付け、第三に脇を縫ひ、その後袖を附け、第四に褄を絎け、第五に前幅を度り、又抱の幅を度り、折目を附け、第六に衿を附け、半衿を懸け、衿幅を度り、衿先を縫ひ、そして後これを絎け付けるのです。

（以下次號）

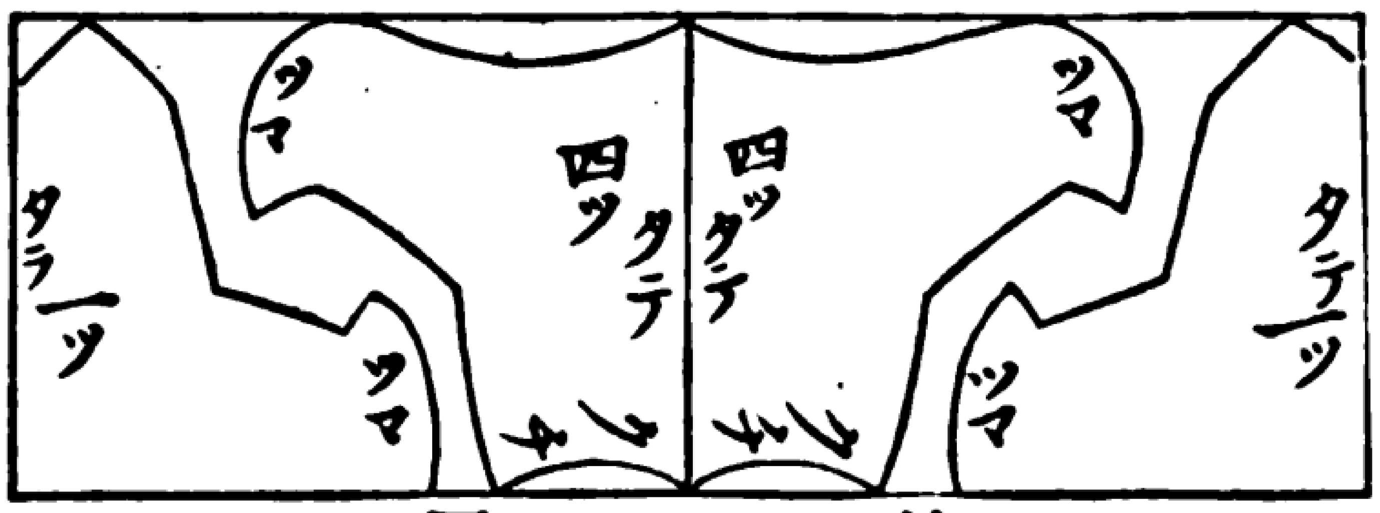
裁縫獨學び（高等の部）

木下貞子

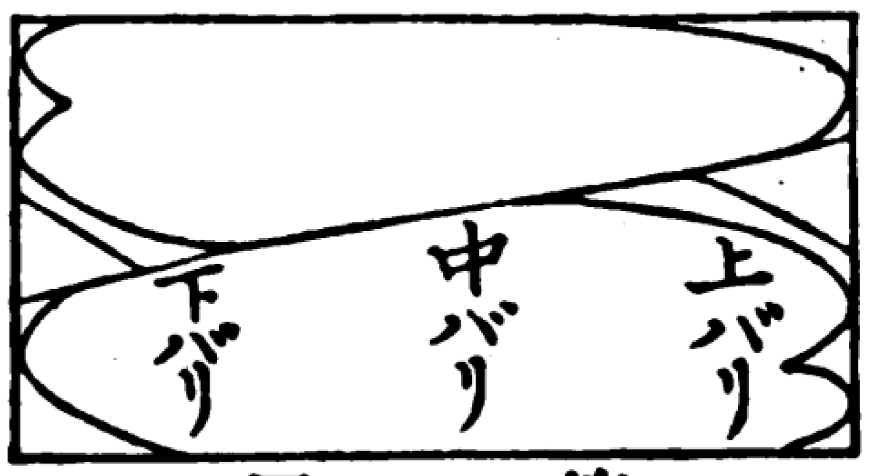
足袋の裁縫法

足袋の種類は四文から十二文迄有りますが、唯形が違ふだけ、其縫ひ方は互に變はりません。

足袋の裁ち方は切地へ形紙を當て、圖の樣に四と一とを裁ち合はせるのです。　是は甲の話ですが、底も同樣、形紙を當て第二圖のやうに裁つのです。



第一圖



第二圖

縫ひ方は初めに口を縫ひ、次に甲を縫ひ、次に堅を縫ひ、次に敷き廻りを縫ひ、次に褄を縫ひ、終りに底を噛み、引きかへし、正しく疊みつけるのです。

この裁ち方は紐足袋の裁ち方ですが、紐は別切れを用ゐでするの

食麵包製造法

食麵包の製造法にも色々有ッて唯小麥ばかりで無く、外に米、大麥、豆粉、馬鈴薯などを交せるのも有ります。そして倫敦で製するのと、巴里で製するのと製法も違ふなど其間色々な事が有りますが、此處では極めて得用な製造を一擧げます。其分量は何れも大きな割にして、そして便宜のため英國のを用ゐます。即ち小麥粉八クワアトに鹽四オンス、水三クワアト、酒酵一パイントを交せあはせ、よく交せた處で燒窯に入れて燒くのです。是はハウスホールド ブレッドと云ッて常食には尤も經濟的です。

文藝美術

唱歌作り方初學(前號の續)

日本語の唱歌に韻が入用では無いとの趣は界前號で述べましたから是からは唱歌の格、すなはち譜曲の事を言ひます。譜曲の事が充分になれば唱歌作り方の大意は既に盡きるとも言ふべき程です。

詩を學んだ讀者は御存じでしやう、詩には五言、七言、六言などの種類が有るものゝ、併し格は平起と仄起との二類と免れません。和歌を學んだ方は亦御存じでしやう、和歌は必らず三十一文字で一定の形をなして居ます。其他長歌と云ひ、俳句と云ひ、川柳と云ひ、凡ろ所謂歌曲の類は一般に一定の格が有ります。唱歌も其通り、一定の格は決まッて居ます。が、自由自在千變萬化の出來る妙は迚も外の物の及ぶ處で有りません。唱歌の格は實に縱橫無盡で凡そ語の調に載るべき物は殘る隈なく唱歌の格に組み立てられます。そして何う言ふ物が唱歌の格式や譜曲を爲す原かと言ふに左の通りの種類です。

(一)三言、(二)四言、(三)五言、實に是です。

で、右の三言とは三の聲から成り立ッた物といふ意味で、

即ち「アラシ」、「クモル」などの類、四言とは四の聲から出來た物といふ意味で、即ち「ユフヅキ」、「サチシカ」などの類、其五言も亦同じ意味です。　で、三言と一口に云ふ物の、三言も其實は（一）一言加二言（二）二言加一言（三）三言の三種類を持ッて居るのです。　一言加二言とは一言の語と二言の語と合したとの意味で、即ち「イ」と「ヌル」と合して「イヌル」となる類です。　二言加一言とは二言の語と一言のと合したとの意味で、即ち「イザ」と「ヤ」と合して「イザヤ」となる類です。　只の三言とは前の「アラシ」、「クモル」などの類です。　次に四言、是には（一）一言加三言（二）三言加一言（三）二言加二言（四）四言の四種類が有ります。　此内三言と言ふ中には前の三言の三種類を含んで居るのです。　次に五言是には（一）一加四言（二）四加一言（三）二加三言（四）三加二言（五）五言の五種類が有りますが、譯は前の三言のと同じです。

さて土臺となる物は三言、四言及び五言の三種の外有りませんが、是が色々に取りまじへて用ゐられるので、極めて複綜した律の出來ます。　まづ（一）三言加四言即ち七言（二）四言加三言即ち別體の七言（三）三言加五言即ち八言（四）五言加三言即ち別體の八言（五）四言加四言即ち猶一種の八言、これら色々の物が出來ます。

さて右の通り組みあはせた處で、どれ丈の物が出來たかと云ふに、即ち三言、四言、五言、六言、七言、八言及び九言の六種です。が、終りの九言だけは四言加五言と看做して差し支へ有りませんが、先云はゞ五種です。　是等を名づけて唱歌の「格」と云ひ、三言の格とか、七言の格とか、それぞれ品柄に應じて喚びます。　以上が格の説明の概略で、是からは唱歌第一の眼目「譜曲」の事に移ります。（以下次號）

第五回懸賞文藝應募得點者

題　うつり香

俳句

殘月にうつり香もがな桐一葉……吉田千鶴子（オホサカ）

うつり香に今もちかひつ土用干……同　上

夏ごろも花の移香なくもがな……植田春園

右いらつめ三部進呈の分

和歌

移り香の殘らざりせばちりはてし
花をかくまで惜しまざらまし……横山ちさ子（ヒウガ）

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

わすらるゝ時こそなけれ無き人の
　其移り香のあらむかぎりは…………同　上
中々にかをりを袖にとゞめずば
　散りにしさくら思ひいでじを…………原田芳五郎(トウケイ)
色も香も花のこずゑに匂へども
　うゑけむ人の無きぞかなしき…………芹澤爲雄(トウケイ)
片身とて賜ひし衣を手にとれば
　猶うつりがの失せずもあるかな…………餘　香(ヒメ)
なき人を夢にみる夜のうれしさも
　さめて悲しきそでのうつり香…………梶田成美(スルガ)
なき人に手向くるまゝに香をとめて
　袖をもぬらす菊のしらつゆ…………矢澤いせい(トウケイ)
なき人の其うつりがのうせなくに
　猶そでぬらす水ぐきのあと…………同　上
　右いらつめ三部進呈の分
いける身のきゆるものとは知りつゝも
　あだに藥のうらまるゝかな…………服部吾一(ミノ)
　右いらつめ十二部進呈の分

唱　歌

散りにし跡も盡きぬ名は
むかしがたりに菊の水
　盡きても果てぬいさはしと
　移りがこめて千代ふるれ。
　　右…………吉田千鶴子(オホサカ)

君とおのれはかむろなす、をさなき時ゆしたしみて、のどけき春のあしたにも、月かげきよきあきの夜も、ともにうちつれ遊びにき。それのみならで夏の日や、冬のさびしき夕にも

おなじまなびの窓下に、打ちむかひつゝへだてなく、ふみよみかはしもじかきつ、いとゞたのしく暮らしけり。げにやうきよはゆめうつゝ、人のいのちはあさつゆの消えゆくよりもはかなしと、誰が言ひそめにけんことわりや。樹々はあを葉のなつ衣、装ひかけしふ月ころ、病ふのとこにつきてより兩親たちはいふもさら、ともどちまでも打ちつどひ、名たゝるくすし招きつゝ、介抱怠らざりしかど、人も天には勝てざるか、無常をつくる入相の、鐘をたよりにはかなくも、きなる泉にたび立ちし、君の思ひやいかならむ。思ひいだせば去年のはる、桃の林にうちつれて、同じ小えだを手をりつゝ、漢の三人の英雄に、ならはんとにはあらねども、義兄弟とちぎりつゝ、慰められつ勵ましつ、御國のためにつくさんと、ふかくちかひし言の葉は、今なはみゝにのこりゐぬ。彼是おもひめぐらせば、心細くもかなしくも、こゝろはみだれ氣はたゆみ先立つものは涙なり。紀念の寫眞うちまもり、もしくは君の俤の、見えもせんかとなきことを、たよりに庭をながむれば、時しもすでに日はくれて月はくまなくさえわたり、千艸にすだくむしの音も、うきを知りてやしわがれて、いとゞ哀れをましにけり
　　右…………服部萍舟(ミノ)

雲か山かと見まどひし　櫻もうたゝ夜すがらの　雨に跡なく移りがを　水に殘して散りはてぬ(春)吉田千鶴子(オホサカ)
五月雨晴れてうるはしく　片破月の山のはに　時鳥かも移りがを　松に殘して啼きさりぬ(夏)…………同　上
夜半の野分はとく過ぎて　萩に薄に冴えわたる　月影清く移

りがを　つゆに殘して消えはてぬ(秋)……同　上
垣根の梅のはゝゑみて　春せく樣をつれなくも　積もれる雪の移りがを　月に殘して埋はてぬ(冬)……同　上

右いらつめ三部進呈の分

秋をちかひし花なれば　もろきは常と知りつれど　移りがだにもナく虫の　聲に溢るゝ露の秋……吉田千鶴子(十六才)

右いらつめ十二部進呈の分

右の外文章の方は次號へ載せます。

第七回懸賞文藝新題　磯の霰に千鳥詠込　一等賞いらつめ卅部 二等十二部三等三部

作は歌曲ならば、俳句でも、和歌でも、今樣でも、唱歌でも、又は詩でもよし。文章ならば何の文体でも一千五百字以上を忌む。歌曲文章共狂体を忌む。原稿ハ廿七字詰で、字体を明に書く事。原稿狀袋共雙方宿所姓名を記す事。以上の制規に背く物は沒書。　十一月十五日〆切。

答書

第廿七號の疑問への答書

問(イ)烟管をキセルと云ふ意味……秋月ふみ子

答　是は全く鑿を違へたので、烟管は烟草を飲む器械、故に是はノミで。鑿は木を穀る道具、故に是はキセルです。

右…高橋さん子

問(ロ)龜井戸流葛餅製法……相田きく子

答　シヨウフと水に浸し、よく攪きまはした後之を澄まして上水を捨て、此法を重ねた末(重ねるだけよろし)、煮て、並の葛餅を作る樣にすれば出來ます。……右…高橋さん子

問(ハ)蒸羊羹製法……相田きく子

答　ザラメ砂糖五百目赤小豆一升相川(上等小麥の粉)百三十目葛粉二十目此割り合ひで蒸羊羹一貫目が出來ます。其法、まづ赤小豆と砂糖で餡を作り、よく冷し、盆に盛り、四分一だけ取ッて除き、それだけの相川を入れ、よく煉り、葛粉を水で解いて入れ、またよく交せ、かうして些し堅くなッた氣味が有れば砂糖蜜を些宛入れてよく混はせ、蒸籠へ入れて蒸すのです。が、蒸籠へ入れるには一寸五六分より厚くない方が宜しいです。砂糖蜜は砂糖を水へ入れて沸えたゝせ、指先で試みて少々粘る頃を度とし、火を引いて冷まして置いた物です。右が最上蒸羊羹の製法で、もし白く作りたければ赤小豆の代りに白小豆を用ゐるのです。……右…高田次雄

外に日本橋菓子商某及び琴水女史の答へも有りましたが大同小異ゆゑ畧しました。

問(ニ)油虫を除く法……紅幽女史

答　座敷に出る油虫は左の法で取れます。即ち蓬か川菖蒲を油虫の通行する處へ挿んで置くのです。右…案野たみ子

植物に付く油虫は左の法で取れます。即ち朝顔の葉か實の煎じ汁を露吹きで虫へ掛けるのです。据風呂の湯の冷めたのを虫へ掛けるのも宜く、又山椒の皮を灰汁で煎じ、其汁を露吹きで虫へ掛けても宜しいです。……右…梶田成美

植物の油虫を去るには一反歩に萩の木の折つたのを二十五六本さして置くのが良法です。……右…旭照雄

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

石鹸水に同量の烟草水を和せ、些し温めて植物の油虫へ掛けるのが宜しいです…………………………右……横尾 喜市

外に答者は仁科美哉氏

望江南栽培法　五月中旬から六月上旬迄の間に豆を蒔く様に薄く播き、二三寸に伸びて一度肥料(何の肥料でもよし)をするのです。重ねても申しますが此草は一切の虫毒の特効薬で、葉の無い時には實を碎いて塗ッても宜しいです。　小兒生歯期には實か葉を煎じ、比麻子油に浸して用ゐれば潰瘍を去ります。又解熱剤に用ゐ、利尿、水氣、肝臓病、又鷄の疱瘡や咽喉病にも利きます。　其詳細はいらつめ第廿七號にあります。

右　長門國阿武郡奈古村　案野たみ子

雜纂

佛國新流行化粧藥ポマドンヌール製法三種

ポマドンヌールは新に佛國に流行する化粧藥の名で、此化粧藥はひゞ霜焼垢切等寒氣から起る一切の皮膚の異常を治すには非常な効能の有る物で、假令ひゞ霜焼垢切の無い人でも之を用ゐれば皮膚を滑にします。　矢張りハンドコロンと同じく其原料には高價な物ばかりですが、効能は疑ひも無い事です。　之に三色の法が有りますが、三色ながら効能は同じ事、たゞ香氣に優劣が有るばかりです。

ポマドンヌール第一種　ケラニウム油十グラム、橙花油四グラム○ポマドンヌール第二種　橙皮油五グラム、ペルガモット油五グラム、苦扁桃油五グラム○ポマドンヌール第三種　ペルウバルサム八グラム、苦扁桃油二グラム、セーロン桂皮油五グラム。

以上のとほりで、之を煉りませれば極めて品のいゝ、滑な膏藥が出來ます。　それを毎日勝手のいゝ時手掌なり顔なりへ塗るのです。　濃く塗りすぎると光々して見苦しいですが程よく塗れば粘りも何もせず最も好い加減です。　都の人には藥品も自由に得られるものゝ、地方に因ッて自由にならぬ處も有る、其の御便宜のため例の通り翁屋へ命じて其内に調製して賣りださせます。

めきしこ國の奇風

何の國にも迷ひは有る事とてめきしこ國の人の考へなどにも間我國のに似たのも有ッて一寸面白いです。　この國では矢張り他の欧米諸國と同じく火曜日を萬事の悪日と信ずる風習が盛で、そして特に可笑しいのは色々な事を物の前兆と思ッて居る事です。　其一二例を擧げれば花嫁が嫁入りの化粧をして居る時血が出る程針で刺されるのは非常な不吉であるの、二人の人が同時に同じ事を思ふのは災の前兆であるの、

家の側で梟が啼いたり犬が唸ッたりするのは主人の死ぬ預兆だのと言ふ事です。　死人の身体が早く固まらぬのは猶死人の出來る譯だの、人を刀で殺し、殺された人が起向になれば罪が露れずに濟の、で無て俯伏になれば露顯するの、鏡が落るか、十三人會食するかすれば死を招くの（この終りの二つの迷ひハ歐米にもあり）など千差萬別中々擧げつくせません。　それから眠つて居る人の頭の後に鋏を十字に開いて置き、また洋燈の油を一二滴その人の頭に滴らすと其人の目は決して覺めぬとか、長尻の客の椅子の下に鹽を三粒置き、戸際に箒を樹てかけて置くとどんな氣の長い人でも歸るとか。是等もこの國の人の一般に信ずる法です。——めさしこほど化物の話の多い處は無く、この國の化物咄を集めるのも、其故、難い事でも有りません。

諸物數へ方

對名と言ッて昔から一寸定まッた言葉が有ります。　隨分面倒で而も時には虛飾に過ぎた事も有りますが、猶習慣も全くは無くならぬ今日、いらつめ方が御心得になッて惡い事でも有りません故、爰に其一班を擧げました。　對名とは一口に言へば、即ち諸物數へ方で笛とば一と言はずに一管とか一枝とか言ふとか、鏡をば一つと言はずに一枚とか一面とか言ふ、それです。　今記者の意見を以て同じ物に二つ以上の對名が有る時には其何れが宜しいか「×」の符號を付けた方を宜しい方と定めて御覽に入れます。　いくら對名だからと言つて餘り耳遠いのは却ッて趣を損ずる物。記者が「×」を付けたのは最耳遠くなく、そして趣も有る方の類です。　いづれでも宜しい場合には對名が二つ以上有ッても何の符號をも付けません。　些し耳遠くても趣が有るのには「△」。耳遠くなくても趣が無いのには「◎」。是等の符號を付けました。

書籍　一部、一冊一卷（△）、全部○掛物　一幅○書狀一通（×）一本（◎）○手形　一通、一枚○切手印紙　一枚○杯臺　一面○銚子　一柄（△）一つ○笛　一管（×）一本（◎）一枝（△）○重箱提重　一組○船　一艘（×）一杯（陋）○車　一輛（×）一臺（×）鏡　一面、一枚○汽車　一列○屏風　一双、一對、一枚○床几、机、脇息、椅子、卓子　一脚（△）一つ（◎）○墨、蠟燭、鉈、鋸　一挺○針　一本○箸　一膳○火箸　一つ○ナイフ一挺○スプウン　一挺○フオーク　一挺○皿　一枚○椀、茶碗、折敷　一人前、一つ○足のある膳　一臺（◎）一脚（△）○足のない膳　一つ、一枚○笠　一蓋、一つ○傘、蝙蝠傘　一本○杖、洋杖　一本○弓　一挺○矢　一筋○鐵砲　一挺○長刀　一振○鎗　一本○太刀、刀　一腰、一振、一本○脇差一本○扇　一本○長持、長櫃、簞笥　一棹、一肩○小袖櫃、葛籠　一荷○樽　一樽○團扇　一柄（△）一本（◎）○帶　一筋一本○小袖、帷子　一枚（×）一重（△）○上衣、マンテル、直衣、シヤツ　一枚○ヅボン　一つ○カフス　一組○カラ　一筋○釦鈕　一粒、一つ○時計　一つ○鎖　一本、一筋○厂、

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

白鳥、鷄、雉子、鴨一番（雌雄二疋。一疋なれば一羽又は一疋）。自餘の鳥一羽。

（未完）

故事の有る國語づくし（其一）

故事の有る國語は一寸知るに面倒ですから思ひついた儘をいろは順にして是から折々載せます。

いはとかしは

昔し景行天皇が戰爭に御出ましの時、盟ッて仰せられたには若しこの軍に勝つ事なら其前表として此石も今柏と變はッて見せろとて足で傍の石を御蹴りになると其石は忽ち碎けて木の葉のやうに爲りました。それをいはと柏と言ふので、意味が轉じて水中の石を後世この故事によッて玉がしはなどゝ言ひます。

岩代の結び松

孝謙天皇の皇子に有馬の皇子と言ふ方が有ッて天下を御望みになりましたが中々叶はず、處がある人が言ふには岩代の國の松を引きむすべば諸願は成就するとの事で、それから皇子は岩代の松を結ばれましたが終に不幸にも望みを果たさず御崩れに爲ッた、その以後は誰も松を解くものなく、それから歌などにも心の解けぬ比喩に用ゐました。此時皇子の詠まれた歌とて萬葉集に歌が載せて有ります。即ち、「岩しろの濱まつがえを引きむすび、まさしくあらば今歸りこん。」後に人丸がこの事實を用ゐて、「岩しろの野中にたてる結び松、心もとけず昔おもへば」と讀みました。

いにしへの野中の清水

桓武天皇の時美作守秦下丸といふ人が役替へで備前へ下ッた途、播磨の印南野で野中の水を掬んで咽喉を濕はしましたが、如何にも甘い水で味が忘られませんでした。其後久しく經て京へ登りましたが、京で煩ひつき、ほと〳〵死ぬ計りの苦みに遇ッた、其處で不圖印南野の清水の事を思ひだしました。味は更に忘れられぬ程の水ゆゑ今も取りよせて飮んだら病ひも治るであらうかと考へては矢も楯も堪らず、人に言ひつけて終にはる〳〵播磨から其水を汲んで持ッて來させ、直に呑みました。長途を經た事ゆゑ水も昔日の冷さを失ひましたが、一念こゝに凝ッて飛びたつ計り喜んだため幸にも病ひは平癒しました。是が故事で、ゐれから昔の心のかはらぬ比喩に後世で用ゐました。詠人不知で「いにしへの野中の清水ぬるけれど舊の心を知る人ぞくむ。」古今集にも是と詠みこんだ歌が有ります。

いはひ杉

大和國三輪の社にある杉で、神木と崇めた物です。木などを神聖にした習ひは昔多く有ッた事で、いはひ槻などゝて槻などとも崇めて有りました。

いつゝの障り

法華經から取ッた婦人にある五の障りと言ふ事で、法華經に「一者不レ得レ作ニ梵天一。二者帝釋。三者魔王。四者轉輪聖王。五者佛身」とあります。

五の色の浪

天智天皇が粟津の宮に御出での頃、寺と御建立になる御志が有りました。其時天皇の御夢に一人の沙門があらはれ、申し上げるには、宮から乾にあたる山に靈窟

が有るゆゑ其處を御求めなさッたら何か變はッた事を御見出しに爲る事であらうとの趣。それから勅使を御差し立てに爲ッて乾の山を探らせると、何處となく光りが輝いて奇瑞が有ッたとの事でした。そこで皇帝も行幸になると仙人が現れて申し上げるには私が以前この湖水を見まはッた處五色の浪が湖水に見え、而も其浪に聲がして五婆羅密を唱へるやうに聞えましたので、即ち其浪の寄せる方を尋ねて移り住み、其以後こゝに數百年、猶今日までも生きて居りますと述べながら聲を張り揚げて「古仙靈窟伏藏地。佐々浪乃長等山」と言ふかと思へば姿は消えて仕舞ひました。皇帝も之に感じられ、やがて其場處に寺を作る事に御決定になり、さて建立しあげたのが即ち崇福寺で、今いふ園城寺、言ひかへれば有名の三井寺でした。これが口傳で、後世五の色の浪とは是から起りました。

井出の下紐　　大和物語にある話から起ッた言葉で、同書にある趣によれば昔男が有てある處女のまだ幼いのと契りを結び（契りを結ぶ事を下紐を解くと云ふ）、後めぐりあッた時女が男を呼びかけたと云ふ事です。それ故後世でもめぐりあふ戀などに用ゐる言葉としました。俊成卿の歌にも「ときかへし井出の下帯ゆきめぐりあふせ嬉しき玉川の水」とあります。

井出の山吹　　山城から奈良へ行く途に井出といふ處が有ッて其處に玉川といふ有名な水が有り、また其水岸に山吹が有る、それと井出の山吹と言ふのです。歌で山吹と言へば必ず井出といふ程の山吹の名處です。六帖に「諸共に井出のさとこそ戀ひしけれ、ひとりをりうき山吹の花」など、有ります。

扇の鯨要の起原

嘉永辛亥年春編成の破柳骨（作者不詳）と言ふ書物に因れば扇の鯨の要は元文の頃京都六角邊に居た小西八郎兵衛といふ者が始めて工夫したとの趣です。

マヽムメモの字義

近着の西洋の婦人雜誌に「マミムメモの響きを持つ語は不思儀に大抵の國で母とか又は母に關係する處に用ゐる」と載せてそれに些し理窟が添へて有りました。同雜誌によれば希臘、梵、すかんぢなびあん、希伯、佛、拉丁、支那、其他二三の國は皆いづれも左樣だとの事です。

日本最上小說十種

前號で愛讀のいらつめ方へ日本小說十種の指名投票を願ひました。彼是御投票を開いて見ましたら高點のは左の六種でした。其括弧の中の數字は點數です。

一　嵯峨のやおむろ　　初戀（三）
二　美妙齋主人　　武藏野（三）蝴蝶（二）
三　二葉亭四迷　　浮雲（二）

Digitized by Google　　Original from CORNELL UNIVERSITY

四　北邙散士　　流轉(二)
五　春のや朧　　細君(二)

右の外雜となッて點數は以上のより少く、些し彼是人が目を付けたのは嵯峨のや氏の一節切、二葉亭氏のあひびき、森田思軒氏のユーベル、美妙齋氏のいちご姫、この子、及び長歌「夢」、末松博士の谷間姫百合、依田百川氏の俠美人、東海散士の佳人の奇遇、春のや氏の書生氣質及び妹背鏡、紅葉山人の色懺悔、饗庭篁村氏の蓮葉娘、矢野文雄氏の經國美談、小宮山天香氏の涙の谷、田邊令孃の藪の鶯、山東京傳の稻妻表紙、須藤南翠氏の朧月夜でした。

成立學舍女子部　神田駿河臺の同學舍女子部では今月下旬學期試驗を終り、直に高等科本科幼年科とも入學を許すとの事で、殊に同學校の進歩とも言ふべきは今春第一回の本科卒業生は十二名の處今度は忽ち倍になつて此度の卒業生は二十四名もある程との由です。

本多せん子　先頃から慈惠病院で子宮患者を診察して居られる本多せん子は倘廣く世の同患者を救ふため芝新堀町三十一番地の自宅に於ても午前七時から十一時迄診察して處分箋を出すとの事です。そして婦人及び小兒の患者に限り無料で診察し、藥代は通常の半額(金四錢)にし、貧困者には之をも無料でするとの趣です。

小説

その一しづく上

美妙齋主人

「いかにせん、頼むかげとてたちよれば猶袖ぬらす松のしたつゆ。」此處を木蔭と見立てた甲斐も無く、つれなくも頬にしたゝる一雫は直に涙と言ッても宜いやう。根の下で蜉蝣の死骸を曳く蟻さへも羨ましくなるのが人情。まして命を賴み、賴まれた境界に於ては?. 言ふまでも無い事です。　昨日までは星を掛けたと言はれた兩眼、今日はその星にも雲が掛かッて、そして昨日まで春ともろとも綠を凝らした黑髮も今日は雪と降りかはッて、冬木と共に骨立ッた四肢五体、その老年に於て杖とも柱ともなるのは誰あらう虫をかぶらせたり、乳房に喰ひつかれたりした我子ばかり。　一歳、二歳、喰ひぞめ、帶解、親は願ひながら薦になッて子をば鷹と見せたい〳〵が母親の阿今が懷胎以來十六年の今日に至るまで變はらぬ抱いて居た宿望、念が屆いて天晴仕上げの出來た我娘、横から見ても縦から見ても其

肉は一切可愛さの塊りから出來て居るやうな。目は些世の人が言ふ美人の標本とは違ふやうな物の、じッと母に凝らした時の其やさしさ、形は何うでも愛嬌がと今更子のために辨護を新に工夫し出すまでの辛苦。唯なら身体も痩せる位、たゞ其痩せをば愛情に償はせて、いざや最う年頃、文學士か理學士か、洋行歸りか財產家か、兎に角立派な婿を取ッてやッてと見ぬ内がたのしみ、雲を遠山として待ちに待ッた志願が終に天に――嗚呼通じぬとは！娘の末子ハ一ケ月やど前から肺病で床へ就いたぎり終に十六の秋を一期として菊よりも早く凋んで仕舞ひました。

娘が萬國史とやらを讀んで聞かせて呉れた時何の國でか昔死んだ後人間を腐らせずに貯へる法を知ッて居たと言ッた事の有ッたやうな、今更その國が羨ましいやう。野邊送りに人足が威勢よく來る、そのしやッ面も憎いやう。坊主、いゝ氣に爲ッてよく頭を剃ッて。花屋、馬鹿！香奠を持ッて來る。御佛前へとして贈られた蠟燭、おゝ嫁入りの高張を照らす運を持たなかッたのか。　金子を包む黑水引き、可哀、赤となれなかッたのか。

それでも慰めてくれる人の有るのが切めてもの心やり。いッそ娘と一途に死にたう厶いますと――心から――言ふものゝ、猶深切な人は坐に有りがたく思はれました。　繰り言は百度千度言ッても同じ事。しかし、それながら言ふ身には物わたらしい心持ちもするやうな。

家は素より後家ぐらし、大した規摸でも無いところ、一人の下女は臺處に掛かり切りで取り次は來合はせて居る親類や手傳ひが爲るといふ始末。勝手不案內、横町の阿絹さんを阿犬さんと通じる程の埓の無いところ、御免なさいと言ッただけを通して音信れたのは近處の小官員の細君阿黃楊でした。

見るからが簪の奈良人形とでも言ひたい小づくり。一寸愛嬌の有る顏立ちで、惡く言へば酉の市の阿龜女郎が活を入れられて生きて現れたやうな、つぼ〳〵とした唇から管で吹くやうな聲を吹出しました。　が、深切者、眞底慰めました。

「實に何とも申しやうの無い事で厶います。　けれど、ね貴母、御身體に觸るやうでは又…ですから餘り…」

と言ッて居る內阿今は旣に手拭を顏。見るまゝに阿黃楊も聲をうるませました。

「御もッと…本當に御可哀さうに。いゝ御嬢さんで厶いましたッけねエ、惜しい事で、本當に。」

「約束事でゝも」、漸く阿今が答へました、「ムいましたらう。とは存じますが彼娘がつね〴〵優…息を引きとります時にも、」てみいる嘆き、「妾をじつと見まして涙と一杯…」

「おゝ〳〵わの御病氣は御氣が確な物で…嘸まア亡くなる方も御心が殘…いえ、さ、貴母、左樣御なげきなすッては、そりや御尤、親子は誰も左樣でムいますが、其處を…伺ッた丈でさへ妾でも御察し申して居ります。ですが、御殘んなすッては亦御身體も大切でムいますから…及ばずながら何なり出來る丈は又妾も御世話と申しては何ですが、御相手に爲りますから。」

優しく言はれるだけ嬉しさは直に悲しみと變はるばかり。有りがたいと言ふ心を點首に言はせて、そして泣きはらした目を人の物のやうに手荒く搔きぬぐひ、

「御醫者さまも御骨を折ては下さいましたが、何うも…」

なせか阿黃楊は此言葉と共に膝を進めました。

「千塚さまでムいましたらう」。

問へば答へる主婦の體、じつと見詰めて阿黃楊は些し眉を顰めて、また一際膝を進めました。如何にも變な樣子、列坐の人も思はずきッと改まりました。

通信問答

心得第一　通信問答は無手數の事〇第二　御問合の事が其答を載せたいらつめより六號以前（此號に限り）にあれば其には委しく答へず、唯其所在を言ひます。尤も其以前に屬する分は更に委しく言ひます〇第三　御問合の文章並びに文字は可成明亮に書く事

西村照子さまへ　硝酸コバルトと云ふ藥は空氣の乾濕により青から紅と色を變じる物で、夫故之を紙か布へ塗り、短册にでもし啓さすれば手輕に晴雨計の啓へ出來ます。

かをる樣へ　(一)皮膚病治療に巧みな醫師ハ東京で神田駿河臺北甲賀町の片桐通明氏です。(二)是ハ委しく言ふ心得故次號へ出します。

TIさまへ　「知るや知らずや しらま弓の露なかきはらひ」。此しらま弓ハ白眞弓と書き、木の[illegible]の弓を言ひます。知るか知らぬか知らないかと言ふ話をしらま弓と掛けたので、白眞弓の眞弓と言つゞけたのハ筒井づゝの井筒などと言ふのと同じく、只重ねただけの事です。

山邊少女さまへ　(一)頭髮に付ける最上の油は次號に出します。(二)硼砂を湯く解かした湯で毎朝顔を洗つて借色が白くなるのは人により一樣で有りませんが、通常三ケ月以上辛抱する氣でなければ爲りません。(三)白地の布へ付いた泥は飯粒を塗り付けて水で洗へば落ちます。

櫻陰子さまへ　布の染色を落ちぬやうにするにハ布を明礬水に浸して乾し上げるのが宜しいです。

琴水女史へ　(一)十字屋で賣る紙腔琴ハ中々清麗な音を出す物で、ハンドオルガンの樣な音色を出します。譜が出來て居て習はずとも奏せます。(二)すゐんとんの萬國史を讀む位の力ではじよんそんのらせらす傳などを讀むのが文學研究上宜しいです。

H．Kさまへ　白鍚青ハ俗に「ビヤクロク」と言つて藥屋に有ります。

君子さまへ　サアサパリラ即ちサルサ根です。純粹の橙花水を賣る藥舗は多く有りません。大抵橙皮油を水にして欺いて賣ります。

河野高子さまへ　(一)ハンドコロンなば神田南神保町の藥舗翁屋で製造販賣します。(二)腹の色の黑いのを去るのハ矢張り今迄いらつめへ出した白色法の中の便宜なのを御用ゐに爲ッて直ります。(三)戚しく言へば水泳の時間ハ七八分を超えぬのが衞生上宜しいです。(四)可なりな理學書ハ金港堂版の理科讀本です。

倭文子　(一)硝石で物を漬けるのハ餘りよく有りません。(二)白髮の預防にハ次號に出す髮の油が宜しいです。(三)呑んで毒にならぬ煙草ハ薄葉の煙草です。

疑問、羅紗帽子の汚點を落す法（石川信子）確答の方にハいらつめ一部進上

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

餘興

新題　懸賞ハポマドンヌール一瓶

(一)中空三角形の謎。第一近頃流行の雜誌の表紙に在るもの。第二。木實。第三猟物に用ゐる物。第四裁縫具。第五野菜。……右……G.S.

(二)姿見の裏の水銀きえうせて。國名三右拗月散士

(三)中實三角形の謎。第一水鳥三。第二木實二。第三花。人の盡くす道。第五古の聖人。右…小田俊平

(四)日本の國名で合へすれば三十六になりますが何の國でしやう。……右…しみづ

(五)私の兩手を縱に重れば日本の國名となり、又橫に並べれば文人必用の消具となります。私ハ何でしやう……右…?道人

(六)食へぬ時に食ひ、食ふ時に食はぬ物ハ何でしやう。……右…倉橋昇平

(七)黄白の岩石さいふ國が日本に有るさの事ですが何の國の事でしやう。……右…臼井保子

右出題者の中G.S.氏さ臼井保子氏との住所が不分明ゆゑ御手數ながら御知らせ下さい。

右七題解答の方にハポマドンヌール、六題解答の方にはいらつめ一部、いづれも進呈。解答用紙は第廿九號に附錄さして入れます。解答紙に認めて無い物ハ。沒書。御投寄の新謎を掲ぐれば其號一部進呈。解答御送付ハ十一月五日〆切。

第廿七號餘興の解

(一)第一ナ、第二ハツ子、第三ナツコメチ、第四子メイ、第五チ、(二)禁獄死刑(近問濕氣)。(三)め。(ユメミの中)。(四)うみにさりゐたつ(卯巳酉亥辰)。(五)五德。(六)ちりもつもればやまをなし、みづもたまればいしをきる。(七)下馱。

皆答者　須藤ふさ子、野口、出來太郎(今一人有りましたが解答用紙に名が有りませんでしたから更に御報知を願ひます。手跡を照らして賞品を差し上げます)。

六題以上解當者　?道人、得手樂人、島田源三、堀江靜子、青柳いち子、藤崎さき子、横田次郎、撫箏女史、山田とみ子、山田尙女、淸水直司、安田芳葉、田中稻祖、小田さし子、福田太郎、いぐちみどり子、山邊しま子、笹川へろ子、高橋三、齋藤くら。

● 學術隨筆 博聞雜誌 每月五廿兩回九月廿日第四十六號發兌 ●

此雜誌ハ高尙ナル學術ノ事ノミヲ隨筆體ノ雜誌ニメ世間ニ多ク在ル所ノ政事ヲ論議シ時事ヲ評論スルガ如キ雜誌ニハアラズ故ニ學者タル人及ビ學者トナラント欲スル人ノ必ズ見ザル可ラザル所ノ雜誌ナリ雜誌中ニ●論說(古今未發ノモノ)●歷史(古今ノ遺事)●傳記(現今ノ實題紳士學者騎人)●天文●地理●人事●農事●工業●商法●技藝●理化●衞生●敎育●敎法●文學●貨物●雜事●廣告ノ小八欄ニ分ツ●是迄見本ヲ送リタル人ニ注文セザル人ナシ以テ其好雜誌タルヲ知ルベシ●弊社ハ決ソ廢刊休刊延刊せず每當日遲延ナク發刊ス万一不幸ニソ禁止ニ遇ハヾ社長親カラ其責ニ任シ辨償スベキ筈ニ付安心シテ御送金アレ●代價ハ一册金八錢○半年分十二册金九十錢○一年分廿四册金一圓七十錢○別ニ郵送料ヲ要セズ○爲替ハ芝口局○郵券代用ハ必ズ一割增○但シ見本ニ限リ一割增ニ及バズ候●廣告料一行廿四字詰六錢○五十行以上五錢

● 東京京橋區弓町十番地　博聞雜誌社 ●

○九月十五日から十月十五日迄の間よ添削を乞へれた草稿ハ某淑女著作の萩の村雨○前に添削を乞へれた浪のまに〳〵ハ福岡日々新聞と約定が整ひ、其方へ賣れました。

地方雜誌發賣諸君中代金延滯の分は來月十日迄に御支拂無之上ハ無據紙上に姓名を掲げます。成美社會計掛

社告及び社則

最初にもある通り今度から一切改正を施したについては前々號からの續稿も今後色々見料らつて出します。今度ハ小說も三種の處、紙幅の都合に因り遺憾なから續篇篤をば書きましたが、次號にハ必ず續せます。又立花屋かをる氏の新作小說「あだ娘」是も既に出來て居ますから右續篇篤か心づくしの終り次第載せます。●次號には抹葉ポルカ(アウタムリーヴス　ポルカ)と云ふ極めて面白い樂曲の新譜を載せます。●從前豫約の方へは其豫約期限だけ第廿八號以後のいらつめ三部を一部さ見做して差し上げます。●第廿八號から本社から賣出す證さして雜誌の終りに成美社の捺印を加へましたから是を目標さして御求を願ひます。捺印の無い雜誌に就てハ本社で一切責に任じません。捺印の無いのを御買ひ求に成つては代金御支拂に及びません。●いらつめ定價並製一部金二錢五厘郵稅共金三錢十二部金二十九錢郵稅共金三十五錢二十四部金五十七錢郵稅共金六十九錢三十六部金八十四錢郵稅共金一圓○二錢四十八部金一圓郵稅共金一圓二十四錢●別製一部金三錢五厘郵稅共金四錢二十部金六十五錢郵稅共金七十五錢五十部金一圓六十五錢郵稅共金一圓九十錢●並別兩製共前金領收の上で無くてハ差し上げぬ事●府內に限り無郵稅●每月四回(八日十五日廿二日三十日)發兌金子御差し送の手續きは郵便小爲替なれば拂渡郵便局とある處に(神田郵便局)と記し受取人欄内に(神田平永町九番地成美社)さ御認めあるべき事●郵券代用ハ郵便爲替の無い處に限り五厘切手で一割增あればおけ無い事●見本ハ五厘切手で並製三錢別製四錢領收の上差し上げます。

從第二十八號
至第三十七號　十部版權所有

明治廿二年十月二十一日印刷同年同月二十二日出版

發行人　山田武太郎(東京神田區平永町九番地居住)
印刷人　佐野忠吉(同市同區同町同番地成美社寄留)

發行所　東京神田區平永町九番地　成美社

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY